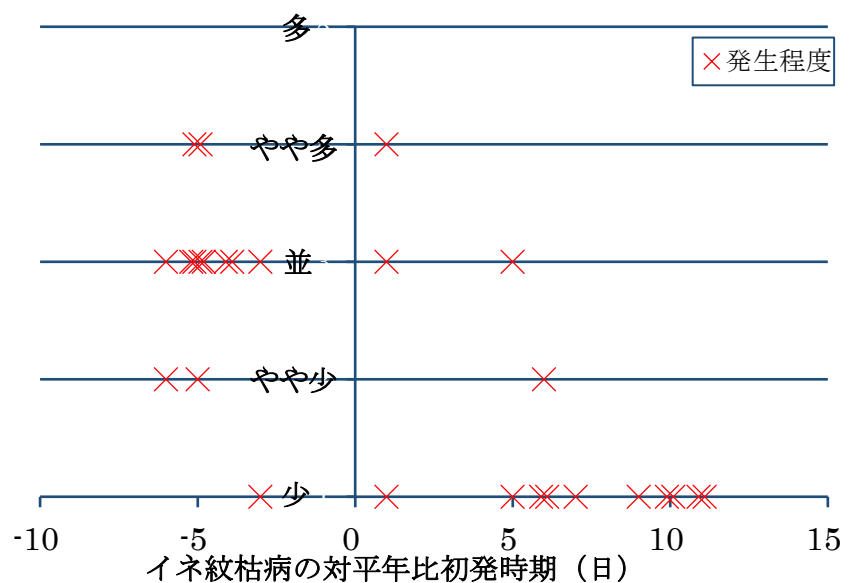


紋枯病の初発時期と発生量について

イネ紋枯病は、代掻き時に水面上に浮上した越冬菌核が、稲体に付着して感染します。伝染源である、菌核は水田内で越冬していますので、前年発生があれば、翌年も必ず発生します。しかし、いもち病のように胞子を飛散させることはないので、急激に隣接圃場に広がることはありません。

菌の生育適温は28～32℃であり、高温多湿条件下で病勢進展が早まります。平成元年から昨年まで27年間のデータをもとに、イネ紋枯病の初発時期と当該年の発生程度をグラフにしてみました。最終的な発生量は、発生後の気温や降水量（湿度）、稲体の生育状況（茎数や栽植密度）にも大きな影響を受けますが、初発時期とも、ある程度の関係が認められます。



上のグラフでわかるように、平年より初発が早いと並～やや多になる確率が高く、6日遅いとやや少以下になり、7日遅いと少発生に留まっています。初発が早いとその後の発生も多くなる傾向が見られます。

本年は平年より6日早い初発でした。平年並以上の発生が見込まれます。向こう一か月の気象予測では、降水量は平年並ですが、気温は高い確率が50%となっており、本病の進展には好適な条件になっています。

現在の発病圃場率は、加賀でやや少、能登で平年並です。止め葉まで進展すると減収をまねき、圃場の一部分の発生であっても、葉鞘の発病は倒伏を起こす引き金になります。今後の気象推移と発病進展に留意してください。